投稿　アンディ・クレイシャさん版「月のうさぎ」

松村雅文（香川大学教育学部）

1. はじめに

月の模様はうさぎに見え、「うさぎは月で餅をついている」という言い伝えは、プラネタリウム等でもしばしば紹介されています。しかし、月にうさぎがいる経緯についての話は、ほとんど紹介されていないようです。通常の話[1]では、「うさぎは神様の食べ物になるべく自ら火の中に身を投じて、文字通りの献身をしたことに神様は感心し、この健気なうさぎを月に送って称えた」とされています。この展開は少々残酷で、子どもたちには刺激が強すぎるということが、その理由のようです。

国際プラネタリウム協会(International Planetarium Society[2]の移動プラネタリウム委員会（Portable Planetarium Committee)[3]は、2014 年から“星のページコンテスト”（Pages of Stars Contest）[4]を行っています。これは、3～5 分程度の短い英語の音声クリップ（mp3 ファイル）を募集してコンテストを行い、集まったファイルはプラネタリウム関係者で共有しよう、というものです。応募できる内容は、(1) 天文および科学に関する解説、(2) 空に関するギリシア（または他文化）の古典的な物語、または (3) 天体や天文現象にかかわるオリジナルな物語や詩などということになっています[4]。2015 年の優勝（2014 年 12 月末応募締切）は、アンディ・クレイシャさん[5]による「月のうさぎ」[6-8]でした。日本の月のうさぎの話が、幼稚園入園前から小学校低学年の子どもたちが聞いても楽しめるように、プラネタリウムのための話として改訂されています。筆者は偶然見つけたのですが、残念ながら日本のプラネタリウム関係者にはあまり知られていないようでした。そこで、クレイシャさんに連絡を取ったところ快諾してくださいましたので、本稿で紹介いたします。

2. クレイシャさん版「月のうさぎ」（試訳）

以下に、筆者による和訳（試訳）を示します。付録に示している英文[6]と比べてみてください[9]。

月のうさぎ：　日本の昔話から、アンディ・クレイシャによる採録

月のうさぎの話を聞いたことがありますか？　月を見て、人の顔を想像したことがあるかもしれません。でも、日本の子どもたちには、長い耳をもったうさぎが見えるそうです。毎年、日本の人たちは、家族でお月見をします。子どもたちが、「なぜ月にうさぎがいるの？」と親にたずねると、親はこんな昔話をしてくれます。

むかしむかし、ほとんどの動物たちはお互いに仲が悪かったのですが、さる、きつね、うさぎは、とても仲の良い友達でした。彼らは心優しく、お互いに仲良く生きていこうと決めていました。毎晩、三人の友達は野原で会って、食べ物を譲り合い、その日あったことを話すのでした。さるは、木から木へと移動し、大好きな桃を探したことを話しました。きつねは、大好きな卵を集めたことを話しました。うさぎは、ほとんどしゃべりませんでしたが、長い耳で、いつも熱心に聞いていました。うさぎが見つける食べ物といえば草の葉だけでした。でも、三人の友達は、何でも譲りあって一緒に食べたのでした。

ある日の夕方、神様は空から三人が食べ物を譲りあって食べているのを見ました。神様は言いました。「信じられない。他の動物たちはお互いに仲が悪いのに、この動物たちはなんとやさしい動物たちなのだろう。それなら、知らない人が来たら、彼らは食べ物をくれるかどうか、ちょっと試してみよう。」

次の日、神様は、古くてぼろぼろの服を着たとても貧乏なおじいさんの恰好になって、地上に降りてきました。三人の友達は、野原でおじいさんに会いました。おじいさんは「助けて。お腹がすいて、もう一歩も歩けない。」と言いました。

「かわいそうなおじいさん、私たちが食べ物を持ってきてあげる！」と、さる、きつね、うさぎは言いました。さるときつねは、食べ物を探しに、一目散に駆け出していきました。でも、うさぎは、離れたところで、少し考えてから聞きました。「何を食べたら、おじいさんは元気になれる？」

「私が好きなのは、りんごだよ。でも他の食べ物でも、とても嬉しいよ。」とおじいさんは言いました。そこで、うさぎは、近くの果樹園にりんごを探しに行きました。でも、うさぎは、木に登ることができませんでした。地面に落ちたりんごは、腐ったものばかりでした。他に何かないかと方々探しましたが、何も見つかりませんでした。「あらあら。」と、うさぎは言いました。「人間は草を食べないし、どうしたものかしら。」あたりは段々暗くなってきたので、少しの草を持って、とても悲しい気持ちで野原に帰っていきました。

うさぎが野原に戻った時には、お月さまはもう地平線の上に輝いていて、他の動物とおじいさんは、すでに食事をしていました。さるは桃を持って帰り、きつねは卵を持って帰っていました。うさぎは、おじいさんに言いました。「おじいさん、ごめんなさい。私はりんごを見つけることができませんでした。おいしい桃と卵の後には、草は食べたくないでしょう。だから、私はもう家に帰ります。」

うさぎが帰ろうとしたとき、おじいさんは、古いぼろぼろの服を脱ぎ捨て、本来の神様の姿を現して、動物たちを驚かせました。神様はいいました。「きつねよ。お前は、卵をおじいさんにくれたとても優しい子だ。ありがとう。さるよ。お前は、一番おいしい桃を私にくれた。お前にも感謝しよう。でも、一番うれしかったのは、うさぎだ。うさぎは、じっくりと私の話を聞いて、一番欲しかったものを探そうとしてくれた。人間たちはお前の姿を月に見て、お前のやさしさをいつも思い返すだろう。」

こう言うと、神様は、高く、高く、高く、お月さまの所まで、うさぎを持ち上げたのでした。うさぎは今でも月にいます。そして、うさぎの長い耳は、人々に、じっくり聞くことが、時にはとても大切であることを教えてくれています。

---

3. さいごに

クレイシャさん版「月のうさぎ」は、長い耳のうさぎの特徴をうまくとらえ、子どもたちも判りやすい素敵な物語になっています

クレイシャさんのメールには、民話は語り継がれていくうちに変わっていくものであり、彼自身も改訂したけれども、また誰かがより良いものにしてくれれば、と書かれていました。筆者には無理ですが、文才のある方には是非お願いしたいと思います。インドで仏教説話として生まれた「月のうさぎ」は、今後、どのように進化するのでしょうか。クレイシャさん版も含め、色々なバージョンの「月のうさぎ」が広く利用されれば、各地のプラネ

タリウム等での解説が、もっと楽しくなるでしょう。

謝辞　本稿作成を勧めてくれたアンディ・クレイシャさん、目を通していただいた木村かおるさんに感謝致します。議論していただいた徳島あすたむらんどプラネタリウムの方々にお礼申しあげます。I would like to acknowledge Andy Kreyche for encouraging me to write this article. I thank Kaoru Kimura, who improved the translation significantly. I also thank the staff of Tokushima Asutamuland Planetarium for discussion.

文 献 と 注 釈

[1] 例えば、今野達 校注、1999、『今昔物語集一』pp.424-427（新日本古典文学大系33、岩波）に所収されています。また、インドの話として『ジャータカ物語』（辻直四郎他訳、岩波少年文庫、1973）に、ベトナムの話として『アジアの星物語』（海部宣男監修、万葉舎、2014）に見ることもできます。

[2] International Planetarium Society
http://www.ips-planetarium.org/

[3] Portable Planetarium Committee
http://www.ips-planetarium.org/?page=portablecom

[4] Pages of Stars
http://www.ips-planetarium.org/?page=pagesofstars

[5] Andy Kreyche さんは、長年、ハートネル大学プラネタリウム(Hartnell College, Salinas CA, USA) に勤めておられた方です。2015 年 6 月末に退職されたそうです。

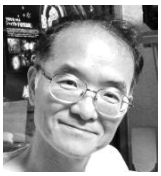
[6] Andy Kreyche「月のうさぎ」(pdf)
http://www.ips-planetarium.org/resource/resmgr/Docs/PoS_TheRabbitInTheMoon_AndyK.pdf

[7] 同上（mp3 の音声ファイル）
http://www.ips-planetarium.org/resource/resmgr/music/TheRabbitInTheMoon.mp3

[8] Planetarian, June 2015, pp.71-72
http://www.ips-planetarium.org/resource/resmgr/planetarian/201506.pdf

[9] 正確に訳すのは難しいと、つくづく思いました。例えば、原文では、さるは she/her, きつねは he/him, うさぎは she/her で表現されているので、それぞれ、女性、男性、女性と判りますが、訳では区別できません。

最後から 2 番目の段落の"I bless you." や "as long as they have eyes to see" も簡単な表現ですが、適訳は難しいです 。



松村雅文

【付録】　アンディ・クレイシャさんによる原文（[6]による）

The Rabbit in the Moon: An Adaption of a Japanese Folk Tale

By Andy Kreyche

Have you ever seen the rabbit in the moon? Maybe you've seen the man in the moon. But in Japan, children see a rabbit with long ears. Every year Japanese people have a celebration. Families gather to look at the moon. And when children ask how the rabbit got to the moon, their parents tell an ancient tale that goes something like this.

Once upon a time, most animals disagreed with each other, but a monkey, a fox, and a rabbit became the best of friends. The spirit of kindness filled them and they decided to live in peace with each other. Every evening these three friends met in a field to share their dinner and talk about their day. The monkey told of swinging through the treetops, looking for peaches, her favorite fruit. The fox talked about gathering eggs, because they were his favorite. The rabbit spoke very little, but with her big ears, she was a very good listener. The only food she ever found was a few blades of grass. But the three friends shared whatever they had.

One evening, a god looked down from above and saw the animals sharing their meal. “I can’t believe this!” said the god. “All of the other animals disagree with each other. Can these animals be so kind? I will test them. Let’s see if they will share their food with a stranger.”

The next day the god came down to earth dressed like a very poor man in an old ragged cloak. The three animal friends found him in the field. “Help me,” said the god. “I am so hungry that I cannot walk another step.”

“We will feed you, poor man!” said the monkey, the fox, and the rabbit. The monkey and the fox dashed off right away in search of food. But the bunny stayed behind, thought for a moment, and then asked: "What food will give you the most strength?"

"My favorite food is apples," said the god, "but I will be thankful for whatever you bring." So rabbit hopped off to a nearby orchard to look for apples. But she couldn't climb the trees and the only apples on the ground were rotten. She looked and looked for something else, but found nothing. “Oh, dear," she said. "People don’t eat grass.” But it was getting dark, so she hopped back to the field with just a few blades of grass, feeling very sad.

When she got back to the field, the moon had risen and she found the others already eating. The monkey had brought peaches and the fox had brought eggs. “Sir,” said the rabbit to the poor man. “I'm so sorry. I couldn’t find apples for you. I'm sure you will not want to eat grass after eating delicious peaches and eggs, so I will return home.

But before the bunny could move, the god threw off his old ragged cloak and revealed himself, surprising all the animals. “Fox,” said the god, "you showed kindness to a poor man by sharing your eggs, and I bless you. Monkey, you gave me the sweetest peaches that you could find, and I bless your kindness, too. But you, rabbit, I bless you most of all. You took extra time to listen and then look for what you knew I would most enjoy. Humans will remember your kindness for as long as they have eyes to see.”

So the god lifted the rabbit up, up, up and placed her on the moon. And there she lives today, with her long ears reminding people that sometimes, the greatest gift is to listen.

* * * * *